審査結果の要旨

氏　名　庄司興吉

本論文は、現代において地球的規模で人類が直面している社会問題を克服するという課題をになうべき新たな社会学の構想を、地球社会および市民連携という理論概念の構築を中心として提示して展開したものである。

著者はまず、基本的社会問題として、核兵器の登場による人類絶滅の可能性の可視化、先進諸国の豊かな社会と途上諸国の大衆貧困に示される階層構造の世界化、先進諸国から途上諸国にまで広がった環境破壊の地球規模化、および途上諸国の人口爆発と対照的に先進諸国で急激に進んだ少子高齢化をあげ、これらの根源に地球的規模での階層構造があると指摘する。そして、これまでの地球的規模での社会構造の諸理論としての市民社会論、社会主義、従属理論、および世界システム論の限界を考察した上で、それらの理念を継承し、さらに現代的問題に対処するための社会学的な準拠枠としての地球社会の概念を提示する。これは、地球的規模で生じている問題をともに引き受ける恐怖の運命共同体であると同時に、地域共同体や個別的文化に根ざしつつも新たな共同性の理念で普遍的に結合されているようなグローバルな共同体の理念である。それを支えるものとして、平和主義、地球主義、環境主義、および人間主義の４つの原則によって主体化されるとともに、総体性を模索し、新しい人間主義と生態系内在的人類社会の形成をめざす地球市民の構想を論じている。その過程で、人間主義やイエ社会論などの新日本主義についてとくに考察を加え、その淵源にあるとみられる和辻らの思想の中にはポスト近代主義的な新たな普遍主義の可能性がありえたとしつつも、現実には、自然の中に社会をなして生きる人間の生態学的構造を浮き彫りにすることに失敗していると分析する。

次に著者は、このように構想された地球社会について、それを支える社会的条件の考察を展開する。具体的には、人間社会が生態系内在性、共同性、階層性、およびシステム性という重層的な構造的契機によって形成されていると論じながら、それぞれにおける問題解決に志向した社会運動と市民運動の展開を歴史的に考察した上で、イタリアの社会学者Ａ．メルリッチによって提示された、絶え間なく進行する差異化の中で自分自身であり続ける「地球社会で演技する自己」からなるネオ・ノマディズム（新しい遊牧主義）に着目する。その上で著者は、ヒトとしての覚醒、労働者の自己変革、市民の再生、社会権・文化権の自覚、生涯感覚の強化を踏まえて、総体性のレベルに達する普遍的市民の概念構想を独自に提示し、地球社会の公論の担い手になるのは、これら絶えず根幹を確かめながら遊牧するネオ・ノマドとしての住民的地球市民による市民連携であると論じるものである。本論文は、著者の長年にわたる社会学研究の蓄積の上に、地球社会と市民連携という概念構想の提出を中心に、現代社会論と社会運動論および国際社会学に新しい視野を開いた独創的な研究として評価することができる。よって、審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。